

法政大学へ ようこそ

WELCOME TO
HOSEI UNIVERSITY



法政大学へようこそ

これからあなたも法政大学の一員です。15学部と大学院に在校生約3万人超、教職員も千人超、卒業生累計47万人を超える巨大な法政大学。あなたは、これほど多くの人々と「法政大学」を通して仲間になるのです。

法政大学にどのようなイメージを抱いていますか？スポーツの法政、なんとなく自由そうな、あるいはリベラルな学校、でしょうか。

法政大学には、「法政大学憲章」があります。これまで培ってきた大学としてのアイデンティティをふまえ、未来の社会に対して果たすべき役割について社会に宣言しているものです。次のページに掲げていますので、読んでみましょう。

01 「自由を生き抜く」「実践知」とは

まず「実践知」とは、簡単にいえば社会をよりよくしていくために働かせる実践的な知性のこと。そして「自由を生き抜く」とは、そのために人の考えを鵜呑みにして自律的な判断を放棄したり、誰かにへつらったりすることなく、常に自ら考えて「実践知」を行動に移していくことです。

なぜ法政大学はこのような理想を掲げることになったのでしょうか。その答えは、法政大学のこれまでのあゆみのなかにあります。

自由を生き抜く実践知

法政大学は、近代社会の黎明期にあって、
権利の意識にめざめ、法律の知識を求める
多くの市井の人びとのために、
無名の若者たちによって設立されました。

校歌に謳うよき師よき友が集い、
人びとの権利を重んじ、多様性を認めあう「自由な学風」と、
なにものにもとらわれることなく公正な社会の実現をめざす
「進取の気象」とを、育んできました。

建学以来のこの精神を受け継ぎ、
地球社会の課題解決に貢献することこそが、本学の使命です。

その使命を全うすべく、
多様な視点と先見性をそなえた研究に取り組むとともに、
社会や人のために、真に自由な思考と行動を貫きとおす
自立した市民を輩出します。

地域から世界まで、あらゆる立場の人びとへの共感に基づく
健全な批判精神をもち、
社会の課題解決につながる「実践知」を創出しつづけ、
世界のどこでも生き抜く力を有する
あまたの卒業生たちと力を合わせて、
法政大学は持続可能な社会の未来に貢献します。

02 無名の若者たち

法政大学の設立は1880（明治13）年、自由民権運動の高揚期にあたります。権利の意識に目覚め、法律の知識を求めた人びとのために、のちに五大法律学校と呼ばれる私立法律学校が続々と作られます。現代でも大学として存続しているそれらの学校のなかでもいち早く設立を宣言したのが、本学の前身・東京法学社です。

この創設を担った、金丸鐵^{まがね}は28歳、伊藤修は25歳、薩埵正邦^{さつた}は24歳と、当時、いずれも大変若く、しかも私塾や個人教授などで法律を学んだだけの若者たちでした。これは、以後、続々と作られる他の私立法律学校の創立者が、有名な人物や官立学校の出身の、いわばエリートであったのと対照的です。このような無名の若者たちの情熱によって、自由民権運動の気運のなかで創設された法律学校であったこと——これが本学の大きな特徴の一つです。

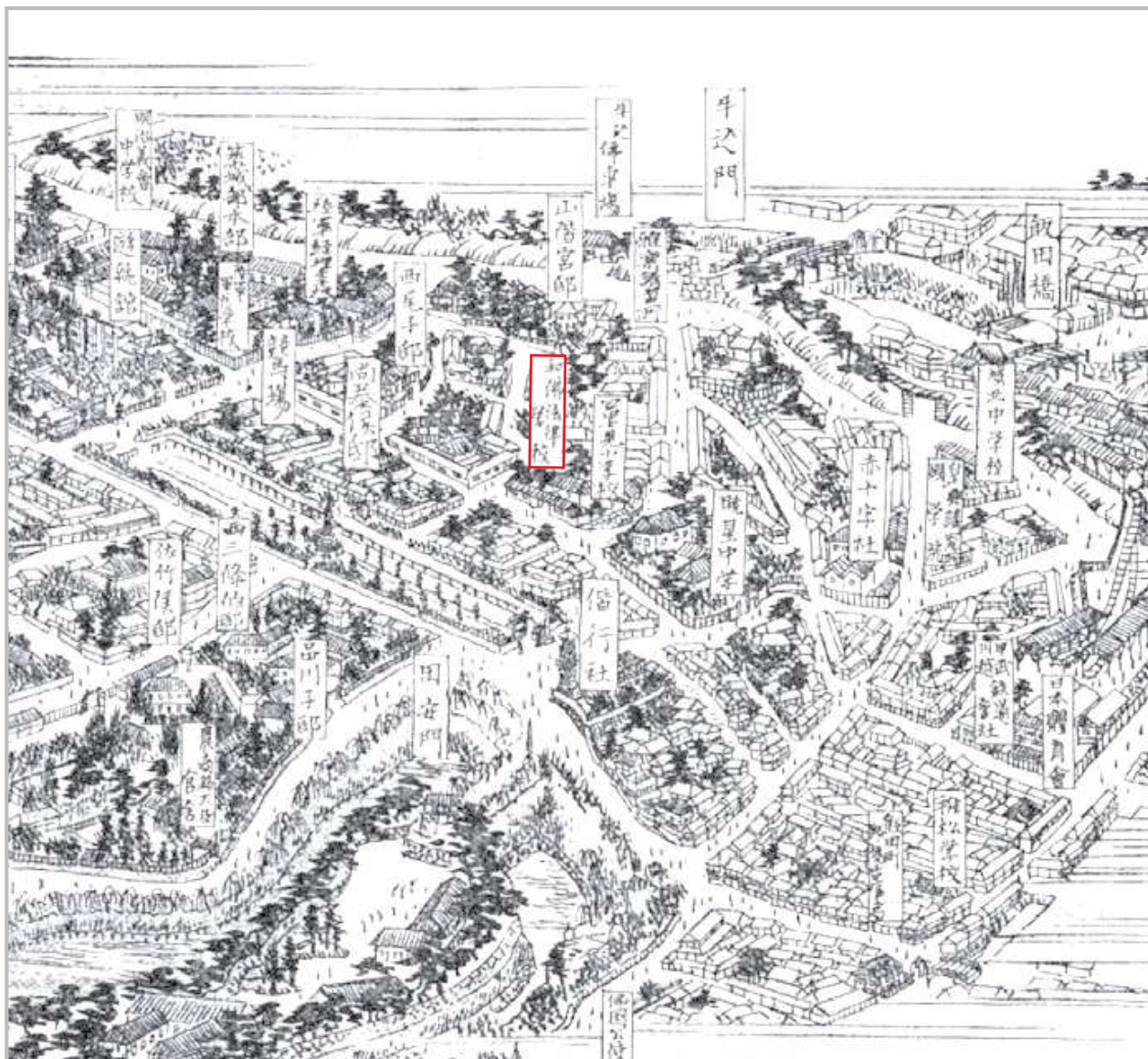
03 人びとの権利を重んじ、多様性を認めあう「自由な学風」

本学の前身、東京法学社は、設立の翌年には教育機能を独立させて東京法学校となります。その中心となった薩埵正邦は、政府の法律顧問として活躍していたフランス人法学者、ボアソナード博士に学んだ人物でした。博士は、約10年もの間、無償で授業を行うなど、教育の中心となって熱心にこの学校を支えて、東京法学校は「ボアソナードの法学校」と呼ばれるほどであったそうです。その教育の根幹にあったのは、フランス法の基底をなす権利をもつ存在としての個人の尊重を思想的基盤にすえる自然法思想です。本学のもう一つのルーツである東京仏学校（1886年設立）と合併し、1889年に和仏法律学校となってからも継承されたこの思想が、個人の権利を尊重する本学の原点となっています。

1921年に現在の市ヶ谷校地に移転（p.7参照）。法文学部と経済学部、予科を擁する総合大学「法政大学」として、ますますの発展をみます。この時代、本学には、夏目漱石門下の俊英たち——のちに総長になった英文学者の野上豊一郎、作家の内田百閒や森田草平、倫理学者の和辻哲郎ら、時代をリードする、そうそうたる知性が集っていました。そこで講じられた、漱石ゆずりの人間への共感に基づく社会や時代に対する自由な批判精神が、何ものにもとらわれることなく公正な社会の実現をめざす、本学のリベラルな校風の基礎をなしていきます。

「よき師よき友、集い結べり」と、教員と学生が尊重しあう良好な関係、変化と挑戦を恐れない「進取の気象」を謳いあげる校歌が学生による制定運動の結果として誕生したのは、1931年のことでした。





風俗画報臨時増刊『新撰東京名所図会』第19編(1899年)掲載「麹町区総図其二」(石塚空翠画)
 ※まん中上「牛込停車場」(今の飯田橋駅)の下に「和仏法律学校」が見える。



法政大学を作った人物たち

薩埵正邦

Masakuni Satta
 (1856-1897)

京都の心学者の家に生まれ、幼くして両親を失い、つとも京都仏学校で学んだフランス語を生かして、ボアソナード博士の個人的な教授によって法律学の知識を身につけます。

東京法学校の主幹としてその発展に情熱を傾けました。市ヶ谷キャンパス外濠校舎の「薩埵ホール」は彼を記念して名づけられたものです。



ギュスターヴ・ボアソナード

Gustave Émile Boissonade
 de Fontarabie
 (1825-1910)

フランスで法律学の博士号を取得しパリ大学などで教えた後、日本政府の法律顧問として招かれ、教鞭を執りつつ種々の政策への助言や法典編纂に尽力しました。その革新的な民法典案が論争を呼んだことは有名です。市ヶ谷キャンパスのボアソナード・タワーの1階と26階スカイホールにはその胸像が置かれています。



04 社会や人のために、真に自由な思考と行動を貫きとおす自立した市民

戦後、1950年代には工学部、社会学部、経営学部を次々と設置するなど、法政大学は大きな発展期を迎えます。この時期に総長を務めて本学を飛躍的な発展に導いた大内兵衛は、「われらの願い」として、「わが国の独立を負担するに足る独立自由な人格の形成」、「学問を通じた世界のヒューマニティの昂揚に役立つ精神の振作」、「日本人の社会生活の向上発展に寄与する人材の育成」の三箇条を目標として掲げました。ここには、これに先立つ戦時下において、多くの人びとが自由な思考を停止して軍国主義の暴走を止めることができなかったことに対する痛切な反省が込められていたことでしょう。世界のあらゆる人びとへの共感に支えられた平和な未来を見すえ、人と社会のために自由に思考し、たとえわずかなことであっても必ず貢献しようと行動する人を育てたいという大内の願いは、今日にまで本学に受け継がれています。

「自由」を貫くことは、責任ある市民としてこの社会を考え、人のために行動しようとするとき、それほど容易ではないこともあります。しかし、そこでぶれることなく行動し通すこと——それが法政大学で学ぶ人として「自由を生き抜く」ということなのです。

05 社会の課題解決につながる「実践知」

戦後占領期に総長に就任した大内が意識した、世界を視野に、社会の課題解決をめざすその精神は、今日の法政大学の支えとなっています。それがまさに「実践知」の母体です。

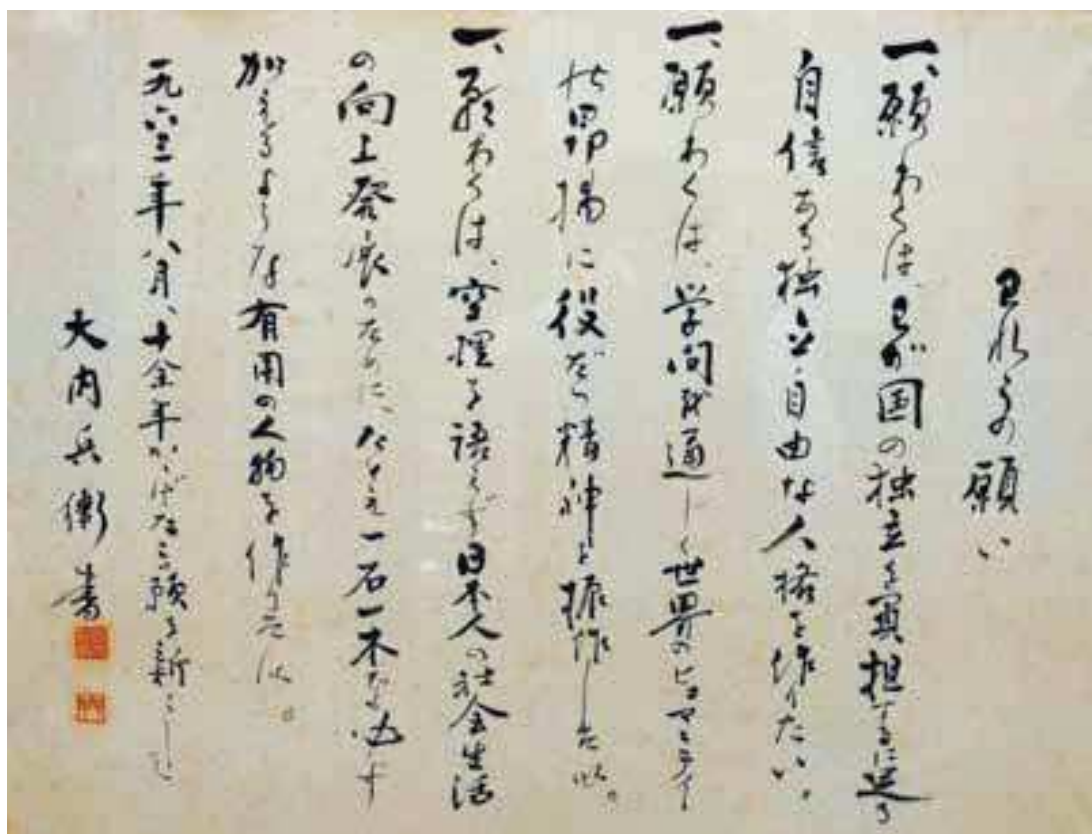
その「実践知」とは、どのような「知」をいうのでしょうか。

それは、すぐ役立つことをめざす実学とは厳密に区別され、「共通の善」といわれる社会的な価値の実現をめざすものです。どこの誰にとっても、あらゆる意味で生きやすい社会をつくるために、それぞれの現場で、必要な知識や情報を十分に集めて適切な判断をくだし、実践に移していける知性、それが「実践知」なのです。

06 持続可能な社会の未来に貢献

敗戦後の日本社会の発展を期することが大内時代の課題でした。その精神を今日の世界にあてはめて考えるならば、何にあたるでしょうか。文部科学省からもスーパーグローバル大学の指定を受けている法政大学が、地球規模で今の課題を考えるとき、あらゆる国や地域の人びとが直面する、持続可能性の問題に取り組むこととなります。それはたんに気候や自然環境のことだけではなく、そのなかで国や地域を越えて多様な文化背景をもった人びとが互いを認め尊重し合いながらともに生きていくために「実践知」を生み出してゆくことです。

そのことは、法政大学の一員となったあなた方一人ひとりとともに、本学がめざしてゆく課題なのです。



「われらの願い」大内兵衛

- 一、願わくは、わが国の独立を負担するに足る自信ある独立自由な人格を作りたい。
- 一、願わくは、学問を通じて世界のヒューマニティの昂揚に役だつ精神を振作したい。
- 一、願わくは、空理を語らず日本人の社会生活の向上発展のために、たとえ一石一木でも必ず加えるような有用の人物を作りたい。



法政大学の礎を作った人物たち

梅 謙次郎

Kenjiro Ume
(1860-1910)

「日本民法典の父」と呼ばれる大学者です。1889(明治22)年、和仏法律学校となった本学の発展を主導しました。梅が創設した清国人留学生のための「法政速成科」は胡漢民・宋教仁・汪兆銘等の中国近代史に名を残す人びとを多く輩出したことで知られています。



大内 兵衛

Hyoe Ouchi
(1888-1980)

著名な経済学者で、戦時下の空襲で多くの校舎を焼失した本学の復興を担った野上豊一郎総長の急逝後、総長として本学に招かれました。1950(昭和25)年から9年にわたる在任期間に、ハード面でもソフト面でも戦後の本学の発展の基礎を築きました。



市ヶ谷校地

和仏法律学校となった1889年に、現在の市ヶ谷キャンパスよりもやや東側に九段上校舎を建てて移転してきました。さらに1921年に市ヶ谷キャンパスのある富士見の地に新校舎を建て、複数学部を擁する総合大学としての発展がここにはじまります。江戸東京の中心、江戸城=皇居の内濠と外濠の間であって、まさに東京の中心に位置する市ヶ谷キャンパス。江戸時代には数多くの旗本等の屋敷が並んでいた山の手の地です。

校歌を知ろう！

みなさんは、入学式で校歌を耳にしたでしょう。法政大学の現在の校歌は、1930（昭和5）年に学生たちの間で新たに作成の気運が高まって、それまで歌われていた校歌（現、行進曲）に代わり、制定されました。そのための募金活動、作詞・作曲者の選定・依頼も学生が担ったという、まさに「学生による校歌」です。

1 若きわれらが命のかぎり
ここに捧げて（ああ）愛する母校
見はるかす窓（の）富士が峯の雪
蛍集めむ 門の外濠
よき師よき友 つどひ結べり
法政 おお わが母校
法政 おお わが母校

2 若きわれらが命のかぎり
ここに捧げて（ああ）愛する母校
われひと共にみとめたらずや
進取の気象 質実の風
青年日本の代表者
法政 おお わが母校
法政 おお わが母校



法政大学校歌の
試聴ページ

<http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/symbol/koka.html>



Alla Marcia

元気のよい行進曲の速度

わが—きわれらが い—のちのかぎり こ—
こ—にさ—き—げ—て ああ—あい—する 母 校—み
は—るか—すま—ど—の ふ—じが—ねのゆき は
た—るあ—つ—め—んか—ど—のそ—とほ—り 上
き—しよ—き—とち— つど—ひむ—すべ—り 法—
政— おお—わが—母校 法—政— おお—わが—母校—



▲近衛秀麿直筆法政大学校歌楽譜

校歌は、これからずっと愛する母校のために尽くそうという志を謳います。

1番の「見はるかす窓の富士が峯の雪、蛍集めむ門の外濠」は、その名も富士見坂から、はるか遠くに雪を頂く富士山を望み、清らかな水をたたえその上を舞う蛍を集められる外濠に隣接する母校。そこは「蛍」「雪」が揃っていて、勉学に励むのに最適だという意味です。蛍の光や窓の雪の光で勉学に励んだ中国古代、六朝時代の学者車胤・孫康の「蛍雪の功」の故事をふまえています。昔は外濠も蛍が住めるほどにきれいだったのでしょうか。

2番の「われひと共に認めたらずや、進取の氣象、質実の風」は、我々学生たちもまた他の人々も皆が必ずや認める（「～たらずや」は「認めないことがあるのか」、反語表現です）、法政大学の時代を先取りする、自由でありながらも飾らない学風を称えます。

作詞者佐藤春夫は、抒情的な作風で知られる詩人で、小説や随筆等にも多才さを発揮した、大正・昭和初期を代表する作家の一人。当時、本学で文章の講義を担当していました。近衛秀麿は、後に首相を務める近衛文麿の弟で、指揮者・作曲家として、草創期の日本のオーケストラ運動を担った人物です。応援団員の古い回想文によれば学生がつてで作曲を依頼したといいます。

本学ホームページには音源も掲載しています。六大学の校歌のなかでも音域が広く、美しい旋律をもつこの校歌。その意味をかみしめつつ歌えるようになるまで聞いてみましょう。



作詞者
佐藤 春夫
Haruo Sato



作曲者
近衛 秀麿
Hidemaro Konoe



霞五郎,1981,
『法政大学物語百年史』
法友新聞社